



へ13  
3416  
42

# 八編 室長 西

## 清言院

室長

南總里見八犬傳第八輯卷之四上套

東都 曲亭主人編次

第八十回 殘仇を斬る毛野莊介と戦ふ 傳來を舒て小文吾兩雄を和む

るんさうさとそちけんじんがいのちをふちまひのいおとす  
復説馬加蠅六郎御武の落葉の刀を引提て登見と立ち鎌倉寒見とち  
對勢の凄からければ寒見のい駭怕れて吐嗟と叫び左右より若黨奴隸が手合せ  
項を扱て動基登時御武声高かふれを巧奴今けり叫びを許さ然とも  
故るて汝が首を刎る先や末期の引道に説示さし聴か抑儂が這西刀の小條  
落葉と命ける世のまらぬ重宝に就中落葉の刀の鋭と莫邪の異るる大をて人を  
斬るとはの時をきく四下る木葉忽地零るとあり因落葉と命ける壁の故官  
領家持氏主の名刀をけ村雨丸と相似る奇特あり或のいをを銚とて

八犬傳八冊卷四上

○文庫堂



倉寒見の才覚期を極めけん。近着く御武を推林め佐と睨て刀祢達徳を  
 陪話まうとも聴の才非非も。今何ぞ隠を其本も是武の果年来宛家を  
 敷んと外見隈の世と澄る假りて巧と知むと悔りぬ怪我のあらん。本意を遂げ  
 素の怨もた刀祢們と敷も果さぬ好かぬ其好もも允さぬ脱る路を  
 誘敵のふるを飲とられて敬篤御武豊実伴當さへ氣味好くね憶もも放ちたり  
 然れども御武の阿容々々として已ぬ勢ひる些も怯まぬ声も立て却暗ら誘  
 へる真の仇討るる。鏢網襲交方劍武器の準備のあはるる東西を當坐の慢語  
 脱る便直であんぞ。又近着く鎌倉寒見のほあせとて身邊の送る息杖茂  
 撥合るる御武の曾前近く衝着て高い山阪長櫃不息杖息さされま命の建場を  
 其首めて御覽せ。とられて冷竹く御武の然も鼻の沾る手面と皺め苦笑ひと丁田  
 主商せ命取る悲し。這奴の心乱れん。巧の技の相心。似而非能優め。ま。このへ

豊実のち笑ひて足踏でも口さる。現朝勝多のり。勿論世の寒見の仇討悲人  
 敵討るる故事をわねも。這奴が宛家の甚麻る。君父の讐殺妻敵殺る情  
 由のいふを。と。寒見のさ。言あ。一。貴回。一條某の年来迄を窺と  
 在る宛家の親の讐言もあ。又妻敵もい。口。是金が宛家を親の家を追  
 出され親類の。寒の竹馬の友も。二世と契り。空枕一夜の夢は。了。柳巷か  
 い。銭言れ。俺。其首路絶て。斬や熟妓も。蜂吹れ。佳成果。皆足金の所  
 為る。那奴の環會。俺。這怨復さ。と。の。運微くて。才。世。金。一。の  
 面汚。茶。小。屋。菰。布。寐。の。夢。あ。打。工。る。金。金。闘。枝。の。さ。え。掬。れ。も。世。不。遇。ね。か。あ。の  
 と。巧。よ。寒。見。よ。と。の。れ。て。弥。月。日。の。照。う。の。形。は。高。憐。も。も。喃。と。口。説。と。所。の。御  
 武。足。踏。鳴。り。焦。燥。て。の。く。措。が。ぬ。形。世。迷。言。雪。暇。の。も。呼。吸。の。音。留。と。抜。閃  
 毛。刃。の。光。の。鎌。倉。寒。見。の。苦。と。叫。び。息。杖。と。合。落。又。撥。取。て。立。ま。く。れ。と。羽。脱。鳥。の





と趕ふ大阪の後に残る一個の奴隷が敷きんとをる刃の光も毛野の身も沈むて左へ外  
を至妙の掙た小鳥を机む若雁鳥の勢ひ當りかけれ奴隷の刃を打落され痛疼を肩の  
信濃路投ての死に這折獨逸速く諷訪の湖水の頭まで來る前向を見且其の  
とちり少半血刀引提て鶴立たる癖者ると必ふを竊の後方近づて樹蔭の  
倚り覗ひる毛野の奴隷と趕捨て又豊実と趕まきせむ性方も知るる一え逃るる外よ  
那奴們を一箇も漏さず敷きんと又いつるもの無いはと獨語り單衣の袷折返と刃鮮  
血を二三遍推拭ひ遺る鞋を合抗てと欲めて柳武の屍骸を撈り小篠の刀拔  
合もつ左見右見て落葉の刀の共小腰を跨々愀然と犬甲の息を吹く嘆息の外  
走り蒐るる刀の端と握り留り引戻せも毛野の引まき伶行足又踏固めてさへ床の

此も騒々氣色る冷笑ひ又ささる汝も敷き馬加們が伴當る外のせで冥土の伴の願  
俺も馬加丁田們と趕々這里まで來ておれぬと汝が擧動今那主従三名を敷き果  
不義の利を飽まき山豪ある遮莫敷れ者の與れ復すあ時宜儘と  
その両刀を俺は返す許しもなく然るに頸を置いての彌勒の出世あまでも只さ去せ  
快返せと馬加丁田又引まき毛野の内りと振動る面を對位と疾視て原來は要あ  
奴も年齢と推計し俺が怨敵あはれも這両刀と知り心かたう那親族族あ  
ぞその身の分際とあつて慢事を受てもなと敷圍て日光りと引抜く落葉の名刀  
真顔臨で敷き刀尖を柱へさす刀の鏝を受て彼此身を反さ程もあはれ敷き大刀を  
復引外抜合と一上二下とまき盡す勇士と勇士の烈しは大刀响丁礮と木をさす受

流走龍の糸風の柳三月の左右不素れて狂ふ亂る春の武術の精妙二龍雲間不  
闘ふ時兩金鱗と零々如く兩虎深谷の争ふ折風黄毛を吹小似て送小疎園のさうけの  
浩処小文五の路次ゆく草鞋を易るともどるも莊介後れく走る諏訪の湖の頭まで  
来て迫るえれ誰う知るは莊介の身の賤し少年と戦ひ既小園多小文五の這光景ふ  
駭たさる此も擬議せ飛が似く小迫着て是れ件の少年の認送せぬ大阪毛野の  
什麼いふさうり又敬馬なれ一入声ありやや大川生止りぬ大阪生も且おね小  
文五もぞ忘れぬかよりあを聞き連り小叫びて林平も毛野莊介の不熟結びて死  
活を争ふ折る大田とさうる暇も吸林と耳の中も根は金鏢を削る勢ひの止るべもあ  
され小文五の兎術るあ心もさう四下をれば茶店の傍小長なる石の榜介の有ける是  
究竟と両も根引抜さる抗て目今毛野と莊介が熟結びる刃の上件の石をち根  
塵木打と争ふさうその戦ひを制めけの登時毛野莊介の刃と石布れも握持る刃の柄を

放さる俱不估とて茲初て制め人の小文五のりを知りければ毛野の口願大田抜力  
且感と且歎ひて絶久小文五の主権が仇と戦ひて果さんとさう折林禁めさう其  
麼る故と問へ小文五合笑ふ異小墨田河の頭也別れ折の絆急あ告る不違る  
かりと和君のいま知らるべ是這人の俺が為過世あける異姓の弟兄大川莊介義  
任と喚做き勇士といふも終然のあとも俺直願て怒と共刃を斂めあひかと論禁め  
又莊介うち對と喃大川生這少年の比具小和殿の報知る孝烈無雙の大坂生情  
由り知られと争ひと止め和睦あひぬ悔と後悔あんと論せ莊介點頭て原來這少  
年の和殿の噂す知る大坂生あけるもあせる怨のあけれども這人東使主従とさ二人  
まを敷る果と俺が重代の両刀を奪取る小塘隄のま走去んとる折某料は這里  
来て那為体と綱窺たまの刀と他も渡さると心の端すの素よりの和殿は由縁あは  
大阪生あけるも神ある身身の知るも一舉小雌雄を決せんを送小挑戰の危かり



莊介

小文五

上田



左  
名刀と賣弄し  
奸黨命を喪ふ

右  
家傳疑ひ残  
解く舊刀  
舊主を返る

毛

上田

馬加







鮮用と云ふは、小文吾急不推禁めて、這里に那首へ角近き所、時と程さかふ  
 知れ、進退難儀及ぶ、御前某大川に後れ、走と這方へ來る程、行装いせ、一  
 個の武士の小髻の痾を肩あたる、路傍に憩ひ、其を喚留め、咱們と武藏の  
 大塚なる大石殿の家臣に諏訪の湖水の頭を、癖者、狼藉せられて、かくの如く痾を  
 肩にあはれ、其のわが賜へ、と請求する、あはる着、とまを、と踏む、刀の片貝を没官せ  
 せ、俺腰刀をせければ、是れ是れ、丁田畔五郎豊実あると猜したる、心勇ま、声高、うら  
 原來汝の豊実、秋越路より、汝們が後を趕、今來ぬ、大田小文吾と知る、汝  
 やと名生、お駭く、豊実の訝り、身と起、七刀を抜んと、けはを、抜、も果む、頭  
 顛、顛、落、件、の、刀、と、復、易、由、元、の、類、を、刀、と、屍、骸、の、邊、送、七、更、走  
 大川に趕着、泊る、の、る、る、大、阪、生、再、會、せ、よ、件、の、豊、実、御、武、門、の、絆、の  
 趣、具、知、の、是、是、と、會、復、た、刀、と、三、大、示、毛、野、の、所、笑、坪、入、り、る、る

中、小、井、社、介、の、感、が、る、と、大、々、と、額、と、拍、つ、連、微、妙、に、計、ひ、る、る、某、と、も、家、傳、の  
 刀、を、大、阪、生、より、泊、る、一、か、が、津、衛、の、刀、の、御、武、の、屍、骸、の、邊、送、七、と、い、へ、御、前、那、人、不、別  
 る、折、備、俺、們、の、面、刀、の、再、も、入、る、と、い、ふ、這、根、刀、の、便、小、就、返、ま、あ、る、せ、ん、と、い、つ、不  
 要、る、に、東、西、何、時、も、留、人、是、も、亦、御、武、の、屍、骸、の、邊、送、七、措、那、那、萩、野、井、が、合、を  
 抗、越、路、へ、と、い、ふ、も、あ、ら、ん、縦、を、及、び、と、も、李、札、が、挂、徐、國、の、君、の、昔、奎、の、劍、と  
 又、も、情、深、く、糸、稻、戸、の、志、の、致、然、と、も、恥、て、件、の、三、刀、を、引、提、と、争、身、と、起、せ、  
 毛、野、も、俱、子、と、あ、ら、せ、と、小、文、吾、や、と、喚、林、林、め、酷、暑、は、往、還、の、跡、絶、と、も、時、程  
 下、う、茶、店、の、主、人、が、村、長、を、報、す、け、ん、介、ら、衆、人、聚、へ、且、萩、野、井、の、後、と、い、ふ、も  
 今、ま、も、來、ぎ、え、又、逃、亡、を、伴、當、和、君、と、認、り、の、あ、る、ん、は、慢、那、里、會、の、危、一、和  
 君、の、這、里、と、い、ふ、甲、非、の、う、赴、は、某、の、大、川、と、俱、の、立、て、面、と、隱、く、其、頭、と、過、  
 旅、客、の、似、と、い、ふ、那、兩、刀、を、送、七、措、趕、着、ん、這、義、と、い、ふ、る、と、又、小、井、社、介、



大田の意見その理あり。ちも揃へてゆく要あり。快立退く俺等を程よた路の等あり。  
矜小除る血と巻隠し。や自外口られぬと諭す。毛野の推辞難く。信のりらふ。  
せん術る。某も申斐の。二約の十町の内か。幹浄茶等。那里へ赴たぬふと。  
便り近づく。快引返す。ぬねと心と附けら。屬ら。毛野の稟苞引提て立別替。  
諏訪の湖や。上社を伏拜。遙き禱る。久後と今も恙あり。栲の校死秋風戦。  
樹立涼し。青柳の驛路投ぐ。いそげけり。介程小井小文吾の。御武門の敷を。  
邊の。要時徘徊。絆の動静を。視ふ。村長を。と。おぼしたの。の。二箇も聚。  
ひまを。程遠く。ぬ里人と。路を。ぬ。走違ひ。罵諍。と。ち。つ。茶店の。公。箱。春。  
飯たう。稍か。う。束。折。御武主。後の。枉死の。骸を。初。く。た。なる。と。言。六。胆。潰。ら。  
引返。先。と。絆。の。趣。を。祝。殿。小。告。稟。さ。え。と。と。そ。終。走。去。り。と。い。這。里。と。諏。  
訪の。神。領。ふ。神。職の。宿。所。へ。近。く。も。ぬ。程。を。其。首。より。入。の。い。ま。も。茶。

店の主人も在ると。あけま。倍々。便り。と。す。井。介。の。推。方。那。両。刀。を。磨。中。の。  
御武の。屍骸の。邊へ。送。措。々。退。き。又。小。文。吾。の。其。く。や。俺。們。が。假。首。級。瀬。六。穴。  
八と。喚。做。さ。小。賊の。頭。顱。を。惜。む。の。る。縁。も。俺。が。姓。名。を。冒。さ。れ。て。鼻。首。  
せ。ま。と。あ。の。一。時。の。權。の。せ。快。く。ぬ。所。の。心。裏。恥。し。ぬ。と。あ。る。や。と。い。へ。小。文。吾。  
點。頭。々。の。美。の。亦。某。の。豫。め。ら。ぬ。措。り。件。の。首。級。の。御。武。們。が。鎧。櫃。の。秘。置。  
よ。と。傳。へ。る。と。の。あ。れ。引。出。湖。水。の。論。め。走。ら。送。恨。る。べ。や。快。く。と。を。せ。し。  
莊。介。雲。時。と。推。林。め。首。級。を。奪。ふ。易。け。れ。ど。然。で。は。萩。野。井。三。郎。の。難。業。及。  
お。の。や。あ。え。那。三。郎。の。ま。ま。を。え。ま。ま。の。所。以。あ。り。後。れ。り。も。竟。不。寄。事。と。  
や。あ。は。那。身。の。苗。害。あ。る。情。深。か。由。元。の。恩。を。仇。り。て。復。ま。似。を。よ。り。思。  
念。を。旋。る。ま。件。の。首。級。の。小。瓶。の。斂。め。酒。の。浸。し。と。鎧。櫃。の。秘。置。と。を。快。そ。  
酒。を。拾。ぐ。箇。様。々。ふ。做。る。是。三。郎。の。越。度。も。も。矧。炎。暑。の。比。る。れ。頭。



みづろその故と問ふ似見介才身と起しく主あけい御武の御高丁田殿と共侶の  
誣訪の湖の頭を茶店の垂垂時惚ひ折落葉の刃を弄ひて小塘堤の下るる跛  
蹇を乞見と銚斬の差ける折年十六六時一個の乞見が走り出て俺東人と扼り矢  
庭の刃と拙取。主あけい若黨二十平及丁田の奴隷之比目敷も果されしはたその為  
体はほろろ箇様々々の術者なれば只這三名のふわぬ丁田殿も痠を肩へて逃走の  
あふ程は在下中亦かの如く左の膝を破れろかきまぐらわされれば後れて来る備輩あつと  
告んとあけい辛くして引外と逃て這里まで来すけれ。痛癢の苦痛も瞑眩して介は  
且く黒白と覚まきまきなく俺かかろる今より些下先の程馬加丁田西側の伴當若黨  
奴隷八九名後れて来るあけい連立て折よく這里を過りぬ遠く嶮近着けて那  
大變を告知せ身の介抱を馮きかたも大家駭謀くの主の先途をえ後左も右も  
せん這首の居れとむろのふく勒るものも。湖水のかま直走のふまて一人あがるあま谷

たふ往還稀るも其暮るもよく知る人あて命果敢てなりぬ。あられ極せぬか。いとど  
苦しは口説くと三郎うち听か駭呆る伴當を遠くええと住る異変をすね  
が。垂垂時も猶豫まき俺の那里快哉。件の容子を檢索せん若們の一面各這  
似見介と肩の被て推續する跡より来る痛癢もも父所あわぬ死ぬえうの思  
糸も。這が東人の不覚の枉死の證據あるがの介。よく勒りぬと吩咐。飛が似  
くお走去れ一個の若黨鞋奴空ののれと迷とま。その餘の伴の後はとど喘  
喘を走らける。悠而秋野井三郎の御武們が敷かれた茶店の追追おまてを且ん既  
てて地方の役人誣訪の祝の家臣某と深澤の村長下誣訪の驛長も。此彼  
とる来會して絆の誣議區々これおる茶店の主人と御武豊実の伴當の  
かく。後れ。這里おまての。那顛未と質問せし茶店の主人の農夫と折々山田の  
耕作の園宅の男女暇あわぬ。代ののれおる。權且店とち空す。春飯たうべ

退る。その間のつれづれの始末を知るといけ。又御武豊実の伴當の東人  
 殊更路次と急ぐ。捷徑とのま走のけん。後れふ。その路違ひ。遅速あり。の  
 故小辨過。適絶。這里のまふけれ。仇と認る。よる。迷惑。のまふ。と言  
 語亦片一陳。寺の。一箇も證人ある。茶店を距る。数十歩。く。と。不  
 一個の男子の胸斬せられ。這里所為。と。不豊実。首を。這里を距  
 る。と。五六町。田畔。屍骸の。地方の。報。一人の所為。と。不  
 なる。照驗。けれ。曲豆実の。則。這里。只。願。衆。議。汝。疑。を  
 折。長尾家の。副使。荻野井三郎。来。那。似。兒。介。の。口。状。を。告。及  
 び。衆人の。疑心。初。解。け。畢竟。荻野井三郎。祝。の家。臣。們。不。對。面。く。相。計。る  
 趣。甚。麼。ぞ。や。又。這。下。の。卷。の。解。分。を。聽。絲。か。し。

里見八犬傳第八輯卷之四上終

